

研究タイトル：

英語軽動詞構文の記述的研究



氏名：	井口智彰 / IGUCHI, Tomoaki	E-mail：	iguchi@oshima-k.ac.jp
職名：	教授	学位：	修士(言語科学)
所属学会・協会：	日本認知言語学会, 英語語法文法学会, 日本英語学会, 英語コーパス学会, 日本語用論学会, 関西言語学会, 全国語学教育学会, 全国英語教育学会, 中国地区英語教育学会, 大学英語教育学会, 全国高等専門学校英語教育学会, 関西英語語法文法研究会		
キーワード：	英語軽動詞, 使用依拠モデル, コーパス, 事態把握, プロトタイプ, 他動性		
技術相談 提供可能技術：	<ul style="list-style-type: none"> ・英語の語法・文法 ・英語学習に関する資料・教材(応用言語学) ・認知言語学 		

研究内容：

本研究の目的は英語軽動詞構文(have/take a V construction)を、実例(使用依拠, usage-based)に即した記述・分析し、構文の意味と機能を認知言語学と語用論の知見に基づいて解明することである。対象とする英語の軽動詞構文は、主動詞構文(eg. Look at this.)に意味的に対応する構文(Have/Take a look at this.)に限定し、統語的に類似しているが意味の異なる動詞派生名詞の構文(have/take N construction, eg. have contemplate)は除外する。

上記の構文は動詞が統語的に名詞として用いられるため、時間的な継続を伴う「動作・行為」は非時間的な物として解釈される。話者は動詞を「動作・行為」を連続した時間の流れ(連続スキヤニング, sequential scanning)として、名詞は静止した物(一括スキヤニング, summary scanning)として概念化して捉えている。「歩く(walk)」が動詞で「歩き(a walk)」が名詞に分類されるのはそのためである。ある事態を「時間的な連続」として捉えるか、「静止した物」として捉えるか、その捉え方(construal)の違いが構文の違いとなって表現される。以上が、認知言語学の知見に基づく構文成立のメカニズムの概略である。関連する研究として、軽動詞構文に於ける修飾表現の精緻化(井口 2018)や、他動の段階性による構文の分類(井口 2020a)を行った。

現在は、英語軽動詞構文の意味と機能を主動詞構文との比較による記述・分析(井口 2020b)を中心に研究を進めている。英語軽動詞構文はその意味的な特徴として、対象や目的を持たず他動性が低いことが指摘されている。主動詞構文に比べるとより間接的な表現になるため、命令や指示などの発話内容の直接性が緩和され、丁寧さ(politeness)が含意される。軽動詞構文が命令文で多用されるのはこのためである。命令文として発話される英語軽動詞構文は、どのような際立った特徴や効果を持つのか、その実証的な解明が今後の課題である。

井口智彰(2018)。「修飾の精緻化と拡張-英語軽動詞構文に共起する形容詞の事例を中心に-」『日本認知言語学会論文集』18, 487-493.

井口智彰(2020a)。「プロトタイプからの隔たりはどのように記述されるか?-英語軽動詞構文の他動性の分類を基に-」『日本認知言語学会論文集』20, 414-420.

井口智彰(2020b)。「英語軽動詞構文の構文としての意味はどこにあるのか?-主動詞構文との比較を中心に-」八木克正・神崎高明・梅咲敦子・友繁義典(編)『英語実証研究の最前線』東京:開拓社, 148-162.

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	